

漢字はホントは面白い VIII

漢字の読み方

杉本 浩

この連載ではこれまで、主に漢字の形について述べてきました。今回は趣向を変えて、漢字の読み方について考えてみたいと思います。

ご存じのとおり、漢字には大きく分けて「音読み」と「訓読み」の二通りの読み方があります。おさらいをしてみると、

音読み：中国人の発音を聞き取って、日本語の発音に移し替えて表した読み

訓読み：その漢字が表す意味を、日本語で表した読み

ということになるでしょうか。

とはいえ、そうはっきりと音読みか訓読みか分けられないケースもあります。

例えば、「馬」という動物はもともと日本列島にいなかった（このことはあの有名な「魏志倭人伝」にも載っています）ので、それを示す日本語はあるはずがなかったのです。中国語の「マア」という発音を聞いて、この動物は「ムマ」というものだとして理解したのでしょう。これが「うま」という訓読みになったのです。同様に、「梅」も中国原産で、中国語の「メイ」から「むめ」「うめ」という訓読みになりました。また、貨幣も中国から伝わったものなので、「銭」と書いて「ぜに」と読むのも、中国語「セン」に由来しています。

これらは今は辞書にも訓読みとして載っていますが、中国から、漢字だけでなく言葉そのもの、「もの」そのものも輸入した例、と言っていいでしょう。

先ほど、訓読みは「その漢字が表す意味を、日本語で表した読み」と述べましたが、実はこの定義だけではちょっとまずい状況になってしまうことがあります。

試しにインターネットで「訓読み 長い」などと打って検索してみてください。びっくりするほど長い「訓読み」がずらずら出てくることでしょう。例えば、

「禰」（トウ）：まつりのそなえもののかざり

「晝」（ケキ）：ほねとかわとがはなれるおと

「砵」（レイ）：いしをふんでみずをわたる

などなど。

これらは漢字の意味を日本語で表した文章に違いありません。でも、こうしたものを「訓読み」と呼んでいいのでしょうか。

これらの「訓読み」には、実は「元ネタ」があります。日本一のボリュームを誇る漢和辞典「大漢和辞典」（修訂版は全15巻、大修館書店）の、「字訓索引」です。ここには上

記のような「訓読み」がたくさん並んでいますが、扉の注意書きに、「『くろいくちびるのうし』(牛へんに孚)の類も字訓として此の中に収録した」と書いてあり、通常の子訓ではないことをほのめかしています。

やはり、「訓読み」というからには、「その読み方を実際の文章の中で使った例がある」ということが必要条件になると思います。

(注：先ほどの長い「訓読み」の一つ目の例「～のかざり」は、実は大漢和辞典の字訓索引の誤植です。大辞典の本文には「祭の供物のお下り」とあり、中国の古い字書の「祭福也」という語釈を引用しています。索引にも「～おさがり」と書くべきところを、担当者が間違ったようです。私が見つめました。ひらがなで長い文を書くと、どうしても見間違いが増えるという好例でしょう)

さて、音読みも訓読みも、一つの字に関していくつもある場合があります。音読みは中国の地方や時代によって変わるし、訓読みは使う人によっても変わってきます。あまり個人個人で勝手な読み方をしないよう、常用漢字表には、認められる音訓が漢字ごとに掲げられています。

でもその中には、音読みしか認められない漢字、訓読みしか認められない漢字もあります(さすがに、両方認められていない字はありません)。

訓読みしかない字は常用漢字の全 2136 字のうち 77 字。このうち、日本で作られた国字(峠、畑など)に音読みがないのは当然ですが、中国でもよく使われる箱、棚、塚、鹿、皿などの字にも音読みは認められていません。もちろん中国語の読みがないわけではなく、日本でこれらの字を音読みで使うことが少ないためでしょう。

音読みしかない字はぐっと増えて 820 字。でも、もちろん、これらの字に意味がないはずはありません。しかし、訓が無ければ、字の意味は他の字と合わせて「熟語」として発揮するしかありません。

多くの字に訓読みを認めると、どうしても「違う漢字で同じ訓読み」(＝同訓異字)のものが増えますが、これについては、常用漢字(その前の「当用漢字」の時代から)では、避ける傾向があったようです。例えば、平安時代の日本の辞書「類聚名義抄」では、思・念・想・懐・・・と 67 種類もの漢字を、「おもう」の意を持つものとしています。しかし常用漢字表では、このうち、「思」のみを「おもう」の字として、他は皆切り捨ててしまいました。日本語の「おもう」には、想や念が似合う場面も多いのに、「想う」などと書けないのは問題だ、と異議を唱える人も多いのです。

(ただし、「うむ」「うまれる」は「生」と「産」、「おりる」「おろす」は「下」と「降」の両字の訓読みとされているなど、例外もあります。)

常用漢字表は、前書きによると「漢字使用の目安」を示すものですから、かならずしも順守しないといけないものではありませんが、公用文はこれに準拠することが求められて

います。皆さんが現役時代に使った「公文書作成の手引」の類も、この表に基づいています。したがって、公用文では「想う」などとは書けません。学校教育と連動する面があるのでこれはやむを得ないことかもしれませんが、文学作品では作家の自己責任で自由な文章を綴ってほしいものです。

訓読みがある字については、やたら多くの読みが載っているものもあります。例えば「生」。なんと 10 種類の訓読みが掲げられています。順に、

いきる、いかす、いける、うまれる、うむ、おう、はえる、はやす、き、なまです。このうち、「いきる」と「いかす」、「はえる」と「はやす」は自動詞と他動詞、「うむ」と「うまれる」は能動態と受動態ですから、別々に数えなくてもよさそうなものですが、常用漢字表では別の読みとしています。なお、「下」についても同じく 10 種の訓読みが認められています。「生」も「下」も、訓読みが多いということは、それだけ日本語の様々な場面で使われてきたと言えるでしょう。

音読みのことなどももっと書きたかったのですが、すでに長文となってしまいました。またの機会にさせていただきます。

*私のホームページもご覧ください！

漢字教育士ひろりの書齋	検索
-------------	----

Google か YAHOO! JAPAN で検索！

この連載のバックナンバーも掲載しています。